No. 1807

谷川岳一の倉沢中央稜

79年6月17日

（編成）L外薗信夫、田中隆

（行動内容）前日、歯痛のため、ほとんど寝られなかったことが、最後の下山にこたえた。

やたらに暑い中、僕達は取付まで、のんびりと歩いて行った。取付に来ると、予想どおり、多勢の人が順番待ちをしていた。そこでのんびりと衝立や滝沢下部を登っている人などを見ていたら、初めて、滝沢下部で人が落ちるところを見た。彼の声は一の倉沢中にこだました。そうこうしていると、滝沢スラブパーティーがルートを変更して、二の沢に取り付くのが見えた。右俣の右壁をやられるのかと思うと、軽いしっとを感じた。

一ピッチ目は、ゆるい草付の壁を左上する。ここは、僕には、岩がボコボコで中央稜で、最もいやに感じたところだ。テラスには人がつまっているので、また順番待ち。二、三ピッチ目も順番待ちとなり、暑いのとあいまって、いい加減、登高意欲が失せるのを感じずにはいられなかった。

三ピッチ目から上は、右にトラバースして登る人もいたのと、僕らの速度がおそかったせいもあって、泥まじりの壁を快適に登ることができた。

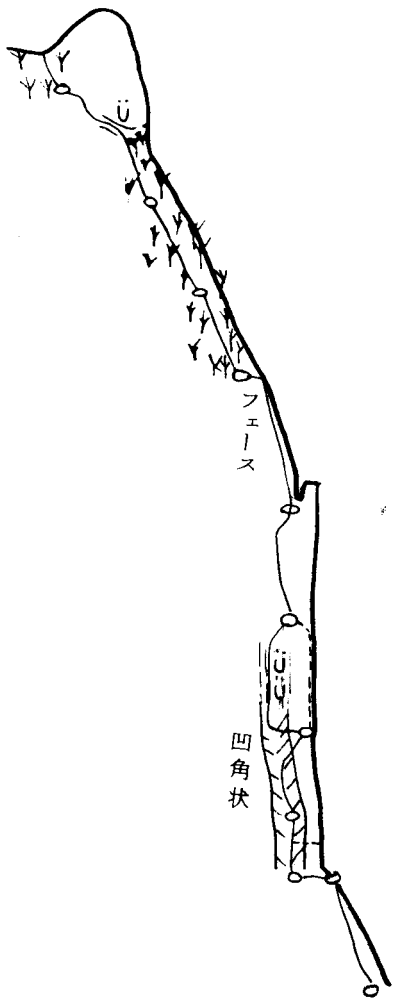
五ピッチ目は少しかぶり気味だったので、人工で乗越した。

七ピッチ目がここで最も快適だったところで、フェース状の上部で下を見て高度感に酔いしれた。

ここから上部は、かん木のはえたゆるい稜となり、最後に小さな壁を登ると終了。

ここから疲労感に襲われ、まだまだ長く危険な一の倉尾根をブヨと戦いながら、一の倉岳に着いた。この辺から、僕がおくれ気味になった。歩きながら眠りそうだったし、のどがからからに乾いていたので、頂上で飲んだジュースは最高だった。

さすがに暗くなってはまずいと思い、厳剛新道を飛ばして、明るいうちに下ることができた。疲れた。バテたのは、少し自分に甘えがあったと思う。

（タイム）出発5・00取付8・30終了13・30稜線15・30マチガ沢出合19・05

（田中隆記）